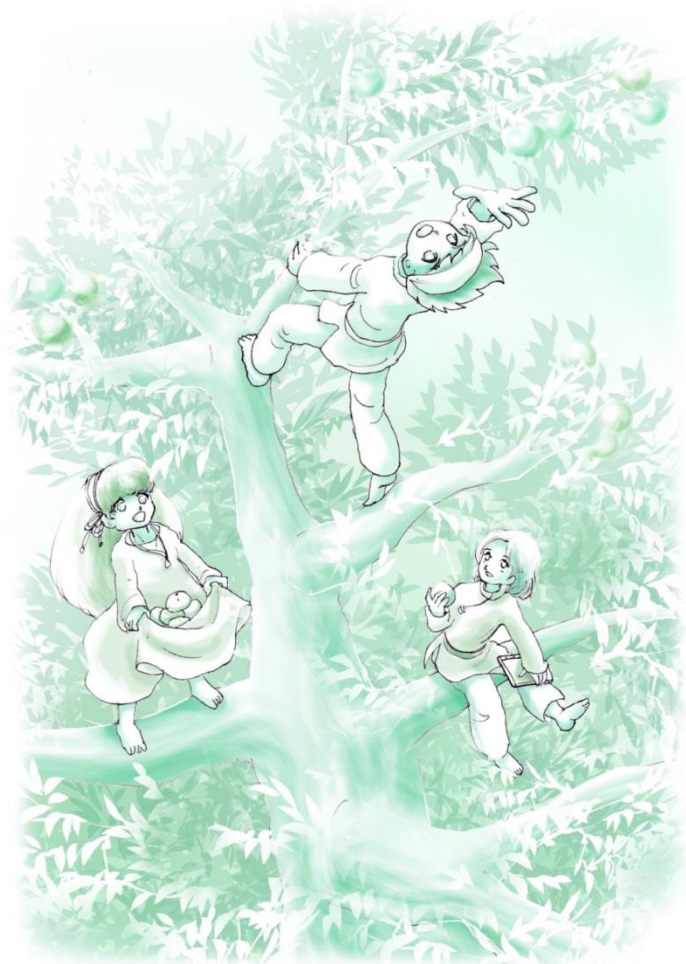


風の末裔シリーズ・6th シーズンの9

～天人唐草～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

夕暮れの修練所前広場。

蹴り玉を追い掛けていた子供達も散り、ゴールポストの棒がポツンとオレンシに照らされている。建物の入り口が開いて、最後の生徒が吐き出される所だ。

「じゃあ、カノン。よく考えておきなさい」

「はい、サオせんせ」

「私は素晴らしい話だと思うよ。でも、まあ、そうだね、君が決める事だ」

「はい…」

教官せんせは、青銀の髪の少年の顔色の悪さを見て取って、余計な言葉は止めた。

カノンはせんせにお辞儀して、土手を登って足取り重く歩き出した。秋の気配が近付いてから、日に日に日没が早くなる。

「なあに、その眉間の縦線は？　まるでこの世の悩みを全て抱え込んでいるみたい」

いつものようにカノンの心情をスバズバ暴きながら、紫の前髪が現れた。

「や、やあ、リリ、今日は早かったんだね」

「まあね、あたしに掛かったら崩れた苔の撤去なんか、チョイ

チョイのチョイよ」

「チョイチョイのドカアン？」

「チョイよ。何であたしがナンでもカンでも吹っ飛ばすと思ってるのよ？」

「何となく」

「バアカ」

二人、歩きながら笑った。笑い声に紛れ込ませて、リリはサクツと言った。

「父さまからの話、行った？」

カノンの笑顔が消えて、また額に縦線が入った。

「うん、放課後、校長室に呼ばれた」

「そう…、で？」

リリはカノンの縦線に気付かない素振りで、わざと強い口調で聞いた。

「で？　って？」

「本格的に父さまに付いて、勉強しないか、って言われたんでしょ。そんな話、執務室の見習いの子が振られたら、躍り上がって喜ぶわよ」

カノンは、覗き込んで来る紫の瞳から目をそらして、口の中でこによこによ言った。

「うん…だけど…いきなり言われたって。修練所に通えなくなるって事だし」

「呑気な一学童でいたいって？ レントと一緒にいたいって？」

「リリ…」

「ここにいる間は、西風の長息子である責任を忘れて、ただの子供でいたいって？ あんた、何の為に留学して来たの？」

「リリ!!」

オレンジの瞳を光らせてカノンは顔を上げた。

「僕の心を読むの、止めて！ 僕、そんな風になりたくない！ だから…」

はっと止まった。

リリの表情が、今まで見た事のない凍り付き方をした。

「リ…!!」

呼び止める暇もなく、リリは獅子頭をひるがえして駆け去ってしまった。

『大っ嫌い！』も『うるさい！』もなかった。

「……………」

追い掛けたい足が前に出なかった。追い付いてどんな言い訳をするっていうんだ。

あの紫の長娘は、ヒトの心を勝手に見透かす。怖い、気持ち

悪いく…そんな噂は、こそこそ悪意を伴って、カノンの耳にも入っていた。

「よー！」

いきなり肩を叩かれた。

頭に粉をかぶって真っ白なレント、ユウジーン。

「何やってんの？ 遅いから迎えに来ちゃった」

いつの間にか、夕陽のオレンジが消えて、夜闇が忍び寄っていた。

「ユウジーンに聞いたよ。長殿直々に弟子入りのお誘いだった？ 凄じじゃん、さすがカノン。今晚はご馳走だぞ。母さん

直伝のチャパティ、期待しろよ」

「…レント…」

消え入りそうな声のカノンに、二人は首を傾げた。

「何だよ、まさか蒼の長殿の指導が怖いとか、尻込みしているんじゃないだろうな」

「レント、ちょっとお待ち」

ユウジーンがカノンの肩に手を置いた。

「執務室の他の者に遠慮しているのかい？ 可能性を持つ者が才能を伸ばす事は、蒼の里だけじゃなく、この世の中に役立つ

為なんだよ。皆分かっているから大丈夫だよ」

「違うー！」

カノンが顔を上げた。

「この世の中に役立つなんて、僕、そんな大層な者じゃない。

みんな買い被り過ぎだよ。きっとガツカリする。今だって、リ

リに酷い事言っって傷付けちゃって」

「カノン？」

歪みたいな上弦の月が、遠くの山陵に顔を出した。

紫の前髪の娘は、放牧地の柵に腰掛けて、片膝を胸に抱え込んでいた。

「ちいーすー！」

振りの向くと、赤いバンダナがいた。

「でっかいカマキリの卵が柵にくっ付いてると思ったら、リリだった」

「な、何よー……その田舎にはフンコロガシでも詰まってるの？」

リリは柵から足を下ろして、慌てて鼻の下を拭いた。

「ふうふうん」

シンはお構いなしにスタスタとリリの真ん前に来て、両手を

突き出した。

「な、何よっ？」

「西風の子供はさ、こうやって、掌(てのひら)から心を通わせるんだ。知ってた？」

「し、知っているわよ。昔、ルウが教えてくれたわ」

リリは突き出されたままの手を凝視しながら答えた。

「じゃあ、握ってくれる？」

シンはサクッと言った。

「な、なんでよっ？」

「いいじゃん、僕、知られて困る事なんか無いし。リリもそうでしょ？」

「あ、当たった前でしょー！」

勢いで顔色の手を握った。だけれど、心が流れ込んでくるなんて現象は起こらなかった。

「……………」

「あは、やっぱりダメか。これって難しいんだって。お互いが合意して呼吸を合わせないと。一方的には出来ない」

「……………」

「出来たとしたら、西風でもやっぱり『怖い』事なんだ」

「……………」

「カノンを許してやってくれない？ あいつ、ただの怖がりなんだ。リリが嫌いな訳じゃないのは分かるだろ」

「……………」

「落ち込んじゃってさ…、リリを傷付ける自分なんか、長殿に教えて貰う価値ないって」

「バッカじゃないの?！」

リリが手を繋いだまま叫んだので、レンは感電したみたいに飛び上がった。

痺れる手を振りながら茫然とするレンから、リリは後ろ手を組んで二、三步離れた。

「ねえ…、最後までちゃんと聞いてくれるなら話すけれど…、聞くん?」

レンは後ろ向きのままのリリを見た。さきばら髪の小さい肩は微動だにしない。

「…うん、教えて…」

リリは肩に力を入れたまま話し始めた。

「正直、『心が読める』ってゆう事なのか、あたしには分からないの?」

「…?」

のか、怒っているのか笑っているのか、分かるでしょ?」

「うん、まあ、それ位なら」

「何で分かるの?」

「えっと…、姿勢とか、表情とか、あと、何となくの空気かな?」

「そうよ、あたしもおーんなじ」

リリは後ろ手を組んだまま、クルリと振り向いた。

「そのヒトの姿を見ると、そういう風に当たり前に伝わって来る。そのヒトが悩んだり喜んだりしている理由が。あたしにしたら、何で皆には分かんないのが、不思議」

「……………」

「ただ、話していて興奮すると、そのヒトがもつ喋ったのか、伝わって来ただけなのか、ごっちゃになって、トラブっちゃったりする」

「…そっか」

「そこん所は、反省しなきゃって思う」

リリは話し終えた感じで肩を下ろした。

レンは進み出て、今一度リリの両手を掴んだ。

「じゃさ、僕の心の中、見てみて? 今、どんな事考えてるか」

「んん?」

リリは、手を握り直して、バンダナの少年の茶色の瞳を見つめた。

「リリ、誰か来たようですよ」

蒼の長は、沢山の書き物に埋もれながら、珍しく家にいる娘に声を掛けた。

「・・・会わない！ 父さま、追い返してー！」

リリはベッドで膝を抱えて背を向けている。

「やれやれ、今度は一体どんな喧嘩をしたんです？」

長が立ち上がったって戸口に近付くと同時に、御簾の向こうで声がした。

「夜分に恐れ入ります、カノンです。リリ、いますか？」

青銀の髪の少年は、御簾を上げて顔を出したのが背の高い長殿だったので、指先まで緊張を走らせた。

「リリ、やはり貴方に用事なようですよ」

「知らない！」

リリは相変わらず背を向けたまま、部屋の奥から叫んだ。

「リリ…、さっきはごめんよ」

「そんな事どうだっていいわよ！ あのテリカシー欠如のドン底バカに比べたら!!」

長殿は二人の間で困ったように苦笑いしている。

「ドン底バカって、シンの事？」

「他に誰がいるってんのよ!!」

「そのシンの戻らないんだ。リリを連れに行くって別れたぎり」

「……………」

リリは膝に埋めていた顎を上げた。

「シンとは会ったんだよね。ね、いつ頃別れたの？」

長殿も真顔になって娘を振り向いた。彼女が戻って来てから、かなりの時間が過ぎている。

「リリ、心当たり、ありますか？」

「し、知らないわよ！ 突き飛ばして走って来ちゃったんだもんー！」

リリは尚も背中を向けたまま、首を大きく左右に振った。

「やっぱり喧嘩したんだ。ね、何があったの？ シンがこんな時間まで帰らないなんて、初めてなんだ」

「何故突き飛ばしたりしたんです？ ちゃんと話さない」

「あの子が悪いのよー！」

勢いよく振り向いた娘の顔は、上から下まで林檎みたいに真っ赤だった。

「あ・あのドン底バカ！ ヒトが弱ってんのいい事に、慰めるふりして、ちよっとの隙を突いて、いきなり、か・顔を近付けて・・・このあたしに対して・・・て・・・て・・・」

動揺のあまり口がきけなくなって歯をガチガチいわせる娘は、目の前にある物全てを噛み砕きそうな勢いだ。

カノンも少なからずショックを受けた。レンの奴、抜け駆けにも程がある。けど、今は彼の安否が先だ。

「リリ、それで、レンを突き飛ばしたの？ もしかして、へっ嫌いー」とか言った？」

「勿論よ！ 二度とあたしの視界に入らないで！とも言ったわ」

「……………」

カノンは背筋を伸ばした。

今のリリをなだめるのは無理だ。それよか、ズッタズタに傷付いてどこかに行っちゃったレンが心配だ。女の子には分かんないだろうけれど、『大っ嫌い』は、言われても全然構わない時と、絶対言われたくない時があるんだ…男の子にとって。

「長殿、レンを捜して、ちゃんと謝らせませうから……っ？」

カノンは、さっきから自分の前に突っ立って動かない蒼の長を見上げて……ビクッとした。

背の高い長殿は、真っ青を通り越して真っ白になって、燃え残りの灰みたいにユラユラ揺れているのだ。

「お、長殿……？」

「……え……はい？ ああ……リ・リリの……くちびるが……どうしたって……？」

「長殿！ くちびるとは言っていないですよ！」

「先っぽ触れたわよっ!!」

「リリ、頼むから混ぜっ返さないで」

「……そう？ ……ああ、まあね……リリも……お年頃ですからね……まあ……まあね……」

長殿の異様なオーラに、カノンはじわじわと後退りさせられた。……このヒトはダメだ！ どうかイッちゃって。

カノンは慌ててお辞儀だけして、踵を返して、駆け出した。

息急ぎぎって駆け込んで来たカノンに、ユウジーンは目を丸くした。

「どうした、レン、いたか？」

「まだ。ね、レンの最後に触っていた物、何？」

「触っていたって……」

ユウジーンは、皿に山積みになったままのチャパティに目をやった。

「これだ！」

カノンは一番上のチャパティを掴んで、両手で握った。

「おい、食べるのは、レンが帰ってからに……」

「静かに！」

三秒目を閉じて、それからチャパティを掴んだまま外へ飛び出した。

三日月が、空の真上から猫の目みたいに見下ろしている。

修練所の広場のゴールポストの丸太のてっぺんに、片膝抱えて座る人影があった。大人の背丈の二倍もある垂直の丸太に、軽々登れる子供なんて、そんなにいない。

その影が、ちょっと動いて片手を挙げる。

「やあ…」

「レン…」

細い月が、土手の上の親友を照らした。

「どうやって僕を見つけたの？ ああ、そのチャパティか。ホント凄いな、カノンは」

「えと、あっ、食べる？ お腹空いてるでしょ」

「ううん、いい…」

レンはゴールポストに座ったまま、背中を丸めた。

「……………」

カノンは何て言っているかわからなくて、チャパティを握りしめて突っ立っていた。



「じはそんな事べらいでレンを嫌いになったりしないよ、って言ってあげたいけれど、ここらでレンに脱落して欲しい…なんて思っちゃっ自分もいる。」

「ね、カノン、こんな細い三日月の晩は、アしが出そうだね」
呼び掛けられて、ちょっと自分勝手なコトを考えていたカノンは、我に返った。

「えっ、アし？」

「ほら、『砂漠の灰色狐』に出て来る『追っ掛け妖怪』。子供が列を作って夜の砂漠を歩いていると、後ろの子から順番に、音もなく拐われて行く…って奴」

「な、何で、今、その話を…？」

「何でかな？ 何となく今思い出したの」

「……………」

カノンは背筋がぞわぞわした。普段からその手の話が超苦手なのだ。

「ねえ、そんな話を急に思い出す時って、すぐ後ろにいたりするんだよね」

「あ、よっつあ、レン」

カノンは震え声で目を伏せた。でも、見たくないと思う程に、

レンの後ろの暗がりに目が吸い寄せられてしまう。

「特に、今の僕みたいに、呪われた気分の子供が…、大好物なんだってえ！」

レンはいきなり顔を上げて、カノンの方を向いた。目の下に太い隈が出来て、尋常じゃない。

そしてそれを合図に、ゴールポストの後ろに垂直の鬼火が立ち上がり、本当に巨大な妖怪が現れた。

縦長の楕円形の半分が顔。一つ目の下の大きな口から舌が地面まで垂れ下がっている。身体の周囲に放射状に、駱駝の蹄を付けた足が何十本もウゴウゴしている。要するに直立した巨大なワラジ虫だ。

「ひえええ!!」

それがどんなに間抜けな姿でも、常軌を逸したモノである事には違いない。カノンは仰天して飛び上がった。

しかし次の瞬間、心臓が凍り付いた。その巨大ワラジ虫がゴールポストに取り付いて、レンを襲い始めたのだ。長い舌が細い足首に、もっちょっとで屈ませつつ。

レンは丸太にしがみついて、引きつった悲鳴を上げている。

「カノン…カノン、タスケテ…」

あの活発な彼が、別人のように震えている。そこまで弱る程『大嫌い』がショックだったのか？。

「化け物、こっちへ来い！」

カノンは土手を駆け降りた。腰に小さなナイフしか持っていない。そんなのよりはいいぞ…！

「カマイタチ!!」

掌と掌を打ち合わせた。あんまり得意じゃないけど、武器っていったら、これしかない。

——ジャッ・・・!! ——

カノンの投げた風は真っ直ぐ飛んだが、ワラジ虫は舌を引っ込めて軽々避けた。

妖怪は弱っている少年にしか興味を示さないみたいで、丸太をゆさゆさ揺さぶり始めた。レンは今にも落っこちそうだ。

「タ…タスケテ、タスケテ、カノン…!!」

「レン——!!」

レンが…レンが、あの大きな口に喰われちゃう!! 誰を呼びに行っている暇もない。今すぐ、自分が、あいつをやっつけなきゃ!!

カノンはカ一杯、両手にカマイタチを作った。肩が沸騰しそ

うに熱くなった。腕を交差させて、思いきり解き放つ。

さっきより格段に強い二つの風の鎌が、フーメランみたいに弧を描いて、妖怪の背中から両側へ抜けた。

——ジャキ——ン!! ——

ワラジ虫はゴールポストと共に真っ二つになって、崩れ落ち……たと思ったら、すうっと消えた。

「わっ!!」

「ゴールポストの半分が地面にドシンと落ちて、その上にレンがひらりと降りた。

そして、空中をひらひら落ちて来る三つに切れた朴(ほお)の葉を掴んで叫んだ。

「幾ら何でも、こりゃないだろ!! どんなセンスしてんだよ?!」

「え? え?」

一瞬の事態を呑み込めないカノンの頭上で、声がした。

「だって、『砂漠の追っ掛け妖怪』なんてあやふやな情報しか言ってるから、そんなのしか思い浮かばなかったのよ!」

背後の朴(ほお)の木のとっぺんから、さっきベッドで怒っていた娘が降って来た。

「だいたいヒトの口で言えるの? なに? あのダイコン演技。

緊迫感も何もあったモンじゃない！ あんなのに騙されるのなんて、カノンくらいじゃないの?！」

「うっさいな！ あんなん見せられて、吹き出すなって方が無理だろ！ それを言うなら、お前の作ったワラジ虫を本気で怖がるのなんか、せいぜいカノンくらいだぜ!!」

「あ…あのお………」

唼々言い争う二人の間で、青銀の少年が遠慮がちに片手を拳げた。

「えっと…今の流れの感じだと…、二人で共闘して、僕を担(か)ついで…って判断して、いいの…:カナ?」

二人、同時にカノンを振り向いた。

「当たり前でしょ！ ちょっと黙っててよ!」

「それ以外のなんだってんだ！ この状態でまだ気付かないのなら、深刻だぞ、カノン!」

「……………」

カノンは黙った。そして、二人の楽しそうな口喧嘩が終息するのを、辛抱強く待った。

「要するにね、あんたがあんまり自分を卑下しているから、自信を付けさせてあげたかったのよ!」

紫のリリは相変わらずの居丈高で、腕組みして言った。嘘が

バシたんだから、もうちょっと申し訳なさそうにしてもいいのに…。

「しっかし、カノン、ホントにド天然な。あのワラジ虫の出来損ないが出た時点で、何か変だと気付かないか、普通?」

目の下の隈のメイクを拭き取りながら、レンも悪びれなく言った。騙されて怖い思いをした当のカノンは、二人に叱られているみたいに小さくなっていった。

何か、違くないか…?

「でも、まあ、最後は予定外だったわ!」

「えっ?」

「シナリオでは、あなたに妖怪は倒せなくて、あたしがカッコよく助けに入る事になっていたのよ。そしてあなたは、修行して力を付けておく事の大切さを想い知る…っ!」

「……………」

「悔しいわよ。自分にはその力がある筈なのに、使えるようにしておかなかったから、いざという時役立てなかったら!」

「……………」

リリはその所は真顔で言い、カノンも神妙に受け取った。きつと過去にそんな経験をしたんだろう。

「長殿も、僕を担ぐのに、加担してらしたの?」

「まさか!」

リリは腕組みをほごいて両手をぶらぶらさせた。

「父さまがそんなに器用なもんですか。あれは、そのマンマの反応よ」

「……………」

「もしかして、父さまが、父親でいる時まで、立派な『蒼の長』だと思ってた? まさか、娘に対しては、ホント、その辺の平凡な父親よ。当たたり前じゃない」

「…うん…」

その辺の平凡な父親ってのは、ちょっとびり逸脱している気がしないでもないけれど。

カノンは肩を下ろして、ふうっと微笑んだ。

そう、騙されたんだけど、腹が立たない。この二人が、自分の事を考えて、相談して、計画して、骨折ってくれた。それをもっと、胸が一杯になった。

そして…確かに、さっき土手を駆け降りた自分とは違う自分が、今、土手を登っている気がする。

カノンの持って来たチャパティは草の上に落ちていたが、砂

を払って三人で分けた。かじりながら三日月の下、並んで歩く。

「カノン、ごめんな」

リリの自宅が見えた辺りで、今更ながら、レンが謝った。

「ううん、嘘でよかった」

「んんん?」

「あらあ、あたしがレンにキッスされたってのが、嘘でよかったって?」

リリがカラッと言った。途端、横のレンが明らかに動揺した。

「レン? リリ?」

「嘘なのは怒っていた部分だけよ。今更キッスの一つや二つで動揺するもんですか。あんた達お子チャマとは違・・・!」

紫の前髪の下、ピンクの唇が、不意を衝いて両肩を掴んだカノンに塞がれた。

「これでおあいこだ」

突き飛ばされてレンに受け止められながら、カノンはチャパティのカケラがくっついた舌先を引っ込めた。

「なあにが『お子チャマと違つ』だよ。口のまわりに食べかすくっ付けちゃって」

「あ・あ・あんだ!!」

「明日から宜しくって長殿に伝えておいてくれ。行こう、レン!」

カノンとは思えない不敵な笑みを浮かべて、レンの手を引いてたちまち駆け去った。

「何よお!!」

リリは叫んだが、追い掛けはしなかった。

「何よ…、まったく…男子って、バカよ、バカ…」

バカと言いながら、今日、二人の男の子が駆け抜けて行った唇に触れる。彼らと過ごす日々の中で、自分がどれほど救われたか。あやふやだった自分の居場所を、彼らがどれだけ掘り下げてくれた事が。

西風の少年達も、やがては自分を追い抜いて、先に大人になって行くだろう。大人になるって、複雑で読めなくなっていくという事だ。それはそれで構わない。彼らの真っ直ぐな少年時代のひとときに、自分がいられた事に感謝しよう。

子供の頃だけに見えていた、道端の花のように。

リリは顔を上げて、細い三日月の家路を歩いた。

くおしまい

二〇一・四・七

